



金門橋の惠風 時効事件②

高木徳一

弥生末の雨がいい。

春の香りと足音がして、人々の心の窓が開かれる。

隅田の流れがゆつたりと西から東、そして南へと

下るその角地の住宅街を目指し、水色のライトバンが明治通りを左折し、日光街道を北上している。

常磐線のガード下を潜り、程なくしてバーンといふ乾いた高音が響いた。

「何だ、ピストルか？」

すんぐりむつくりの長谷川が緊張した声を張り上げた。

「おい、どうして停めるんだ？」

栗林主任がギョロ目更に拡大させ怒鳴る。

「ハンドルが左に持つていかれまして、パンクかも・・」

長いもみ上げの橋本運転手が答えながら降りた。

「後ろのタイヤがペちゃんこです」と車内に声を入れた。

「困ったな。直ぐに交換しろ」

濃紺の作業服と帽子を身に付けた三人が外に出て、慣れた手付きでタイヤを入れ替える。

「予定外の時間が取られたから急げ！」

助手席で待機していた主任の声に後押しされ、運転手は加速を付けた。

吉野通りの入り口を越えた丁字路の信号を右に曲がり、運転手は百米入り、左の路地の先を見た。

「主任、目的地に誰か立ってます」

「直ぐにどくさ」

タバコを吹かしながら携帯電話を掛けてるんで

す

主任は腕時計を睨みながら、「早くどかんかな」と言いつつ、厚唇を噛む。

駄目だ、時間がない。一つ戻った路地に急げ！」

ライトバンはバックしつつ、そのまま一階家が並ぶ道に侵入した。

左側先端のネズミモチの垣根に接するようにして停車させた。

車の上には慈雨を浴びている染井吉野が咲き誇つ
ている。

顔から足の先端まで細身の野口が降りて、車の前
後に工事中の標識看板を立て掛ける。

「あと五分だ」

主任のしゃがれ声で車内に緊張の糸が張り巡らさ
れた。

野口が看板を仕舞い込むと同時に後部ガラスの真
ん中の一部が開いて、長谷川が銃口を構える。

「いいな、必ず仕留めるんだぞ」

声の代わりに第一狙撃手は頷いた。

「マンションから出てきたぞ。深呼吸をしろ」

彼は息を吸つた。

「傘を差し出している男が邪魔になつてます」

「落ち着け、チャンスは来る」

スコープの焦点に相手の背中が合つた。よしと心

に叫び、引き金を引こうとした瞬間、相手がスコ

ープから消えた。エツと思わず声が出た。

「出かしたぞ。とどめもさせ」

「いえ、私はまだ発射してないんです」

「何だと！ そう言えば、今も重い音がしている」
「主任、倒れた相手が迎えの車に引き摺り込まれ
てます」

「誰が撃ったんだ？ 相手が死ななければ幹部か
ら拷問を受けるぞ」

「最初の一発で倒していますからかなり腕のたつ
人物です。それに継ぎざまに四発も浴びせていま
すので命はないでしょう」

「馬鹿やろう、長谷川、幹部にどう言い訳するん
だ！」

「正直に言うしかないと思いますが」

「それこそだらしないと、一蹴されるに決つてる」

「それとも四発撃つて、私がやつたことにします

か？」

「俺の頭も混乱して善後策が浮かばん。帰りに考
えるわ。どうか、先程の男に違いないな。四回の

下見であるが一番狙い易かつたからな」

「主任、出発しますか？」

「そうだな、ぐずぐずしてると仲間と間違われ、非常線に引っ掛かつては元も子もない。あとはリハーサル通りだ」

車を移動させ、男が居た場所に朝鮮人民軍のバスジと大韓民国の十ウォン硬貨を、主任が窓から落とした。

「先程のコートを着た男が自転車で角を曲がりました」

運転手がアクセルを吹しながら叫んだ。

予備の狙撃兵の野口が口を挟む。

「馬鹿もん、追跡してどうする、犯人の特徴と逃走経路を警察にちくくるのか」

「・・」

「いいから、直進するんだ」

速力を増したライトバンは日光街道に出て南下し、

入谷で右折して言問通りに入り、上野寛永寺近くで停車した。ナンバープレートの前に主任が立つと、音もなくプレートが替わった。次いで、黄色いテープが自動で出てきて、窓の下部に張り付いた。ドアの開閉部分を部下が切り取った。そしてライトバンはアジトへと向う。

この車は盗んだもので、改造を加えている。また、呼び名も全て偽名。

一方、先程の男はライトバンが来る二十分前には現場に到着し、電車音が入ったテープを流しながら携帯電話の番号をブツシュした。

「もしもし、恵君か」

「はい。会長」

「今、上野駅にいて会社に向っているんだが、気になつている事があつて確かめようと思つてな

「何でしようか？」

「今日の午後の航空券は未だ貰つていないよな」

「ええ、昨日は大阪出張から遅くなつたので直帰

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。